エッセイ

『砂漠の国の柔道場』　『第九話』カリール副所長の慈顔

岡本文夫　（元アラビア石油、元国務大臣政策担当秘書）

アラブ人が希求する緑の空間　カリール副所長邸

カフジ時代に深く交流した方々の中で、忘れられないお一人にイブラヒム・カリール政府関係担当（Government Relations）副所長がおられる。

アラビア石油の現地での操業は、利権協定の規定により厳重な石油省の指導下にあったし、内務省は日本人始め外国人が同国の公序良俗に反することはないかと厳しく監視する環境下にあったから、政府担当副所長と言う立場は、ある部分は現地政府が指名するお目付け役であったり、ある意味では外国人従業員の立場を理解したりという難しい立場だったろうと推察した。

彼は最も敬虔なモスレムであるとともに、冷静で思慮深い教養溢れる人物であり、フェアな視点で物事の判断が出来る性格をアラブ人従業員たちからも敬愛されていた。政府関係担当という立場に最も妥当な人事が行われていたということだろう。

そのカリール副所長とは、業務上の関係はなかったし、日頃直接の交流もなかったのだが、筆者の存在についてはよく認識していてくれたと思える事象が多かった。

つまり、筆者のアラブの人々との交流に関する本気度を好意的に観察して貰えていたようだ。柔道文化の無風地帯に道場を開設して、長男まで連れてアラブ人の弟子たち

を指導しようとする日本人従業員など、鉱業所開闢以来ひとりもいなかった。
『第二話』で述べたように、カフジ最大のイベントであるカフジ・マラソンやアラブ人小学校の体育祭における柔道デモンストレーションは、ローカルガバメントから政府関係部経由の依頼によるものだが、間違いなくカリール副所長が関与するものだ。
しかも、小学校のデモの際は、筆者の長男までデモに参加するからと、妻が娘を連れて参観しようとしたものだから、観衆の男達が激怒して騒いだ。カリール副所長は立ち上がって演説して、これを宥めてくれた。現地の習慣では、女性は頭から足先まで黒づくめの衣装で顔を隠して、隔離された一郭に集まっていなければならないのだ。
アラビア語の演説はサッパリ解らないが、副所長はこう言っていたはずだ。
「これだけ多くの子供たちが、柔道を指導して頂いている。ミスター岡本の長男まで参加してくれているのだから、岡本夫人の参観は特例として認めようではないか！」。

考えてみれば、各省庁の高官の息子たちが続々と入門してきたのも、カリール副所長の後ろ支えによる信用があったからかも知れない。
その傍証ともいえるのが、副所長とは親子ほど年齢の違う末弟アブドルアジズが入門してきたことだった。彼は、在ジェッダの名門キング・アブドルアジズ大学法学部を優秀な成績で卒業し、教授への道を歩むべき若者だった。「一度はビジネス社会を経験しろ」という長兄の指導もあって、アラビア石油へ入社した。本来ならば、カフジという田舎の石油開発現場になど来る筈もない超エリートだ。
「ミスター・オカモトに柔道を指導して貰ってきなさい」と言われた彼の入門が、カフジのローカルガバメントの各高官たちの子弟が続々入門する上で、良き呼び水として働いたことは間違いないだろう。彼は田舎仕事が務まる人材ではなかっただけに、残念ながら半年程で大学に戻って行ってしまったのだが、後段で述べる通り、湾岸戦争の後にジェッダへ出張した際、9 年ぶりに大学教授になっていた彼とは再会して旧交を温めることになる。

一回目のカフジ勤務を終えて、本社で広報の任務についたのだが、まず現場の紹介ビデオ作品『Al Khafji Today』をプロデュースした。目的とするところは複眼的だった。サウディアラビアとの石油開発に関する利権協定は 2000 年に終了するのだが、膨大な埋蔵量を誇るカフジ油田での生産は、我々の手で継続したい。そのための利権協定の更新は会社にとって必須であり、現地政府の理解を得る一助として日本人とアラブ人が共同して石油生産を継続してきた姿を認識して貰う必要があった。
同時に、日本の政官財各界の応援もまた必須であり、その認識促進のための説明資料が必要だ。筆者が予め準備したシナリオ原稿に従って、TBS の子会社のスタッフを連れてカフジ出張が実現した。
複眼的目的を達するためには、作品のナレーションは、日本語、アラビア語、英語をカバーしなければならない。そこで、アラビア語ナレーターは雄弁な美声で鳴るリヤド事務所長のアリ・サイードに依頼した。更に考慮したのは、作品完成後の現地政府へ

アピールするとともに、作品の権威づけのためにカリール副所長に検収役を依頼して、初めての東京出張が実現した。お二人とも本社出張を喜んで協力してくれたのだが、勿論、完成した現場紹介ビデオ作品の政府要所への配布にも機能してくれたことは言うまでもない。

そうした経緯もあって、筆者の二度目のカフジ赴任を副所長は大変喜んでくれたようだった。早速、自邸へのご招待に与かった時の写真を冒頭に掲示した通りだが、緑を希求する砂漠の民だから、見事につる草をレースのように配した緑陰の居間がこれ以上ない程の憩いの空間を醸し出していた。

第四話で述べたように、筆者のカフジへの再赴任の時期は、7 年間も続いていたイラン・イラク紛争の末期的状況がカフジにまで被害を及ぼしていた。更に一年後、消耗し切った両国が双方とも勝利宣言して戦争は終結した。やっと訪れたアラビア湾の平和は、結果的に一年間しか続かなかった。次にやってきたのは、恐怖の湾岸危機の到来と更に半年後の湾岸戦争勃発である。

小長啓一社長の従業員の生命安全を確保するためのナーゼル石油大臣との捨て身の折衝のお蔭で、戦争突入の前日午後、石油省からとおぼしき電話があり、翌朝未明何かあるかもしれないという通知があった。その夕刻、戸野駐在専務は、その時点で残留していた日本人従業員 47 名を集め、荷物の準備をしておくよう指示した。そして、開戦を確認したら、団体行動で退避することとした。究極の恐怖の中でも精神的に健常者とみなされている 13 名の従業員が運転する車に全員が分乗して陸路退避をする予定だった。

覚悟していたとはいえ、底知れぬ深い恐怖が我々を包み込んだ。恐怖の極にある時のあるべき行動は、皆で集まり励まし合って恐怖を分散するのが一般的である。

しかし、筆者が発作的に取った行動は、18 キロ北方のクウェイト国境方面の状況偵察だった。我ながら本当に馬鹿な行為だったと、後から深く後悔したのだが。

現地人が退避しきったカフジは、完全にゴーストタウンと化していた。街を外れて砂漠となった辺りを高速通過しようとする頃、後ろから警告クラクションを鳴らしフラッシングしながら猛追する車があった。

『シマッタ！』。停車した筆者に、警察か軍隊か解らない男が、「ワワワッ！」と、気が狂ったかのように猛烈に突っかかってきた。絶体絶命のピンチとは、こういう場合のことを言うに違いない。男自身は目を吊り上げて完全に冷静さを失っていた。同僚達も安全圏に退避したにも拘らず、何でこの俺だけがこんなところに残って仕事させられているんだ！という錯乱状態にいるに違いない。筆者が恐れたのは、自身の発作的行動を espionage と被疑されたらたまったものではない。そんな精神状態の輩に仕事され、檻に叩き込まれて戦争が始まったら水も食料も無しに置いてけぼりの憂き目だ。日本人従業員たちは、見当たらなくなった筆者を、恐怖に負けて先に自分だけ逃げた卑怯者と考えるだろう。

わめく相手には英語は全く通じない。数時間後に遭遇するイラク軍の猛砲撃も怖かっ

たが、この時ほど万事休したことはなかった。
　その時、まさに奇跡が起こった。車の通行など絶無の状況下、カリール副所長の車が通りかかって停車した。『地獄に仏』とはこのことだ。興奮納まらぬ男に対して、日頃の温厚さを忘れたかのように怒鳴り合って、筆者を解放してくれたのだった。
　しかし、人っ子ひとり通らない国境に向かう道路で、何故奇跡は起こったのだろうか。その疑問は、長く脳裏の片隅に残り続けた。

　2 ヶ月間続いた湾岸戦争の終結を待って、我々は鉱業所に戻り猛砲撃で被災した現場の復旧に努めた。そして、生産と出荷の再開を見届けた上で、筆者は本社帰任して、総務部次長として総務・広報の任に当たった。
　小長社長は、アラビア石油の石油開発権益を更新するために政官財各界の応援を取り付けて、サウジ・クウェイト両国との高級折衝を展開した。
渡部恒三通産大臣の両国石油大臣折衝、平岩外四経団連会長のファハド国王表敬、皇太子殿下ご夫妻の両国ご訪問など、通常ではあり得ないほどの高次元の外交レベルでの交渉であった。広報担当としては、各使節団の随行記者団のアテンドを通じて、精緻な応援記事の実現に努めた。また、現地政府による深い理解醸成に期待して、日本人とアラブ人が如何に共同して事業展開してきたかを示すためのビデオ作品をプロデュースした。『Two Wheels Go in Tandem（両輪は共に進む）』は、日本語、アラビア語で作成して、再び国内及び現地政府へのＰＲとした。
更に、35 年史『湾岸戦争を乗り越えて』（日本語・アラビア語）を編纂して、戦争の危機迫る中、最後の最後まで日本人はカフジの現場を死守したことを、両政府に強調した。
同書の制作は著述業の専門家大森浩氏にゴーストライトをお願いした。同氏は元産経新聞政治部次長でアラビア石油の成立以来の事情に精通しておられた。
湾岸戦争に関するナマな体験情報を発掘するために、命懸けで任務を全うした現場のキーマンたちを次々にインタビューしに、筆者は大森ライターを案内して回った。
ジェッダ、リヤド、クウェイト、カフジへの 10 日間かけての現地取材だった。
感受性の強い大森ライターは、クウェイトでの高梨駐在代表の家族連れでのイラク軍による人質体験については泣きながら取材をしておられた。

　さて、取材対象の主要人物。カリール副所長は湾岸戦争が終了して間もなく定年を迎え、出身地のジェッダに戻って悠悠自適の人生に入っておられた。
日本人、アラブ人が一致協力して最後の最後まで事業の存続を死守した記録を纏めようという企画には心から賛同して、大森氏のインタビューに応じてくれた。
そして、一族の優秀な青年たちを集めて歓迎会を開いて頂いた。
「これからは、サウジ人と日本人は各分野で益々協力して行かなければならない。
この歓迎会はそのための出会いの場としてほしい」。カリール氏らしい思いやりの籠った挨拶だ。歓迎メンバーには、今や大学教授となった柔道の弟子でもあったアブドル

アジズも加わっており、旧交を温めることが出来た。
　久しぶりのカルーフ（羊の丸焼き）パーティということで、ジェッダ訪問は初めてだった筆者は腕をまくり素手で食べ始めたところ、青年たち全員から奇異の目で見られているのに気が付いた。見れば、彼らは全員とも皿に肉と焼き飯を取り分けてフォークを使って食べていた。
「ミスター・オカモトは、よほどサウジ駐在が長いのか？ジェッダでは、誰もそんな食べ方はしませんよ」。全員が笑い転げていた。素手で食べるのは内陸部とアラビア湾側だけの風習らしい。紅海側の国際港として発展してきたジェッダでは、食事マナーはもっと洗練されているそうだ。

　さて、カリール副所長。何故、湾岸戦争突入前夜、絶体絶命のピンチにいた筆者の前に現れる奇跡が起こったのか？一番質問したい疑問だった。
「ああ、あの時のことね」。慈顔を微笑ませながらカリール氏が答えるには。
「ミスター・オカモトと一緒ですよ。イラク軍が攻めて来るとしたら、当然国境を越えて来る。今、国境はどうなっているかが気になっただけですよ」。
『本当にそうかなあ？』
　鉱業所が発行しているなかなか立派な電話帳があった。勿論、鉱業所を構成する全部課の電話番号が網羅されているのだが、ローカル・ガバメント始めカフジの主要組織が併記されているので、筆者にはカフジという地域とそれを統治する組織を理解する上で参考にしていた。その組織のひとつに『Civil Defense』というものがあり、これが何であるのか、優秀な部下に訊いてもよく解らない。ガバメントの一部門なのかと訊いても、違うけどそのような意味合いもあるという。それじゃあ民間組織なのかと訊けば、そのようなものだが、政府とも関係が深いという。
結局、筆者の理解するところでは、『自警団』ではなかろうか。平和ぼけした日本で、年末に「火の用心」を触れ回る友好団体的のようなものではない。実は、国民全員が銃で武装しているような危機意識溢れる民族だから、軍隊や警察とは違った市民主体の自警団を構成するように内務省が義務付けしているのではなかろうか。
勿論、推測でしかないのだが、政府関係担当副所長のカリール氏は自警団の責任者かそれに近い要職にあったのではないか。戦争前夜、カー・チェイスして筆者を停車させた男が軍人か警察か解らなかったが、その第三の組織のスタッフだったかもしれない。猛追しながら「不審車発見！追跡中！」と発信したから、カリール氏が処分判断のために飛んできたのでは？

　筆者を解放させた後、カリール氏は一緒に鉱業所方面に帰るのかと思いきや、逆に国境の方向に向けて車を急発進させた。あと数時間で戦争突入だというのに。
自警団の責任者であったとすれば、危機管理上の要所に最後までスタッフを配置してある筈だが、これが恐怖に負けて任務放棄して逃散していないか確認が必要なのか？あるいは、思いやり溢れる彼のことだから、国境に配したスタッフに、もう危険だか

らお前も逃げろと解放しに行ったのではないか？

何故、あの絶体絶命のピンチに陥った小生の前に絶妙のタイミングで現れて頂いたのかを尋ねる筆者に対して、『そんなこと、どうでもいいじゃないか』と、カリール氏が慈顔で笑っていた

ある日の大人の部稽古メンバー

筆者横は日本語教師本木くん、その横がアブドルアジズ

末弟アブドルアジズを鍛える筆者

ジェッダのカリール豪邸での歓迎会。集まったのは、政府関係者、サウジ航空幹部などカリール一族のエリートたち。元弟子の末弟アブドルアジズ（筆者右側）は、キング・アブドルアジーズ大学の教授に昇格していた。
前列右端がカリールさん。前列左端が大森浩ライター。

おかもと・ふみお

1947年生まれ。アラビア石油勤務を経て、元国務大臣・村田吉隆衆院議員の政策担当秘書を務めた。2013年「小説湾岸戦争 男達の叙事詩」（財界研究所刊）を伊吹正彦のペンネームで出版。講道館柔道五段（クウェート国柔道連盟七段）。

To be continued

Documentary Essay

"Judo Gymnasium in the Desert Country" Chapter 9

Compassionate Smile of MR. Khalil

Fumio Okamoto (Former Arabian Oil, Former Secretary for Policy Affairs of the State)

A Dreamful Green Space Desired by Arabs: Deputy Director Khalil's Residence

Among the people I had close ties with during my time in Khafji, one I will never forget was Deputy Director Ibrahim Khalil for Government Relations.

Arabian oil's local operations were under strict supervision by the Ministry of Oil due to the provisions of the concession agreement, and the Ministry of Interior strictly monitored Japanese and other foreigners to ensure they did not violate the country's public order and morals. I imagined that the position of Deputy Director for Government Relations was a difficult one, as he was partly an inspector appointed by the government and, in a sense, also parson who had to understand the position of foreign employees.

He was a devout Muslim, but also a calm, thoughtful, and well-educated person, and his ability to judge things from an impartial perspective earned him the respect of his Arab employees.

It seems that the most appropriate personnel decision had been made for the position of government relations officer.

I had no working relationship with him, and we didn't have any direct contact on a daily basis, but there were many occasions when I felt that he was well aware of my existence.
In other words, he seemed to have taken a favorable view of the seriousness of my interactions with Arab people. Not since the oil operation founding had a Japanese employee been willing to open a dojo in a judo-uncultured area and bring my son along to teach Arab students.

As mentioned in Chapter 2, the Khafji Marathon, Khafji's biggest event, and the judo demonstration at the Arab elementary school's sports festival are requested by the local government via the Government Relations Department, but there is no doubt that Mr. Khalil instructed.
What's more, when there was a demonstration at the elementary school, my wife tried to take our daughter with her because even my son was going to participate, where infuriated the men in the crowd and caused a commotion. Mr. Khalil stood up and gave a speech to appease them. According to local custom, women must dress in all black from head to toe, their faces hidden, and be confined to a separate area. I couldn't understand a word of his Arabic speech, but I'm sure he said something like this:
"So many children are being taught judo. Even Mr. Okamoto's son is participating, so let's make an exception and allow Mrs. Okamoto to attend!"

Come to think of it, the reason so many sons of high-ranking officials from various ministries and agencies have been joining my judo school may be because of the trust he has built up through his support.
Supporting evidence of this is the fact that his youngest brother, Abdul Aziz, who is almost old enough to be his father, joined my judo school. He had graduated with honors from the Faculty of Law at Jeddah's prestigious King Abdul Aziz University, and was a young man destined for a professorial career. With the recommendation by Mr. Khalil, who told him to "experience the business world at least once," he joined Arabian Oil. He was typical elite employee who would never have come to a rural oil development site like Khafji.
His introduction, “go and get some judo instruction from Mr. Okamoto," undoubtedly served as a good catalyst, attracting many children of high-ranking officials in Khafji's local government to join judo class.

Unfortunately, he wasn't up to the task of rural work and returned to university after about six months. However, as I'll explain later, I was able to reunite with him for the first time in nine years on a business trip to Jeddah after the Gulf War, where we rekindled our friendship.

After finishing my work in Khafji, I took up a public relations position at the head office, where I produced a video introducing the site, "Al Khafji Today." It's goals were multifaceted. Our oil development concession agreement with Saudi Arabia expires in 2000, but we want to continue production at the vast Khafji oil field. To achieve this, it's essential for our company to renew the concession agreement. To gain the understanding of the government, we needed to promote the image of Japanese and Arabs working together to continue oil production.
At the same time, support from the Japanese political, bureaucratic, and business circles was also essential, and explanatory materials were needed to promote this recognition. Based on a script I had prepared in advance, the trip to Khafji was realized, accompanied by staff from a TBS subsidiary.
To achieve this multifaceted goal, the film's narration had to cover Japanese, Arabic, and English. Therefore, we asked Mr. Ali Saeed, head of the Riyadh office, who has an eloquent and beautiful voice, to provide the Arabic narration. Furthermore, we considered the film's appeal to the government after its completion and asked Deputy Director Khalil to act as an acceptance inspector to further establish its prestige. This led to their first trip to Tokyo. Both of them gladly cooperated with business trip to the head office, and of course, they also helped distribute the completed site introduction video to key government offices.

As a result of this, Mr.Khalil seemed very pleased with my second posting to Khafji. As you can see from the photo at the beginning of this article, when I was immediately invited to his home, the shady living room, beautifully decorated with vines arranged like lace, created the most relaxing space possible, as the desert people crave greenery.

As mentioned in chapter 4, when I returned to Khafji, the Iran-Iraq conflict, which had been going on for seven years, was reaching its final stages, with damage even affecting Khafji. A year later, the war ended with both exhausted countries declaring victory.
The peace that had finally arrived in the Arabian Gulf ultimately lasted only a year. Next came the terrifying Gulf Crisis, and six months later the Gulf War broke out.
Thanks to President Keiichi Konaga's desperate negotiations with Oil Minister

Nazer to ensure the safety of his employees, we received a phone call, likely from the Ministry of Oil, the afternoon before the outbreak of war, informing us that something might happen in the early hours of the next morning. That evening, Managing Director Tono gathered the 47 Japanese employees who remained at the time and instructed them to prepare their luggage. Once the outbreak of war was confirmed, we decided to evacuate as a group. The plan was for everyone to board vehicles driven by 13 employees who were considered mentally sound despite the extreme fear, and evacuate overland.

Even though we were prepared, a deep, unfathomable fear enveloped us. In times of extreme fear, the proper course of action is to gather together, encourage each other, and disperse the fear.
However, my impulsive action was to scout the situation 18 kilometers north toward the Kuwaiti border. I later deeply regretted this, realizing how foolish it was.

Khafji, with the locals evacuated, had become a complete ghost town. As I was leaving the city and heading through the desert on the highway, a car tailgating me from behind, honking its horn and flashing its lights.
"I'm in trouble !" I stopped, and a man, I couldn't tell if he was police or military, lunged at me, yelling, "Wa-wa-wa-wa!" as if he'd gone mad. This must be what he meant when he say a desperate situation. The man's eyes were wide and he had completely lost his composure.
He must have been in a state of confusion, wondering why he was the only one left working here, while his colleagues had also evacuated to safety. What I feared was that my impulsive behavior would be suspected of espionage. Working by him in that mental state, I would be locked in a cage, and if war broke out, I would be left behind without water or food.
Japanese employees would probably think I was a coward for succumbing to fear and running away first, now that I was nowhere to be found.
That man yelling didn't understand any English. Although I was terrified of the fierce Iraqi artillery fire that was to befall us in a few hours, nothing could have been more hopeless than this moment.

At that very moment, a miracle occurred. With absolutely no traffic on the road, Mr. Khalil's car passed by and stopped. This was the definition of "a god in hell." He yelled at the excited man, seemingly forgetting his usual gentleness, and finally let me go.
But how could a miracle happen on a deserted road leading to the border? This

question lingered in the back of my mind for a long time.

After waiting for the end of the two-month Gulf War, we returned to our job site and worked to restore the site that had been damaged by the fierce artillery fire. After ensuring that production and shipments resumed, I returned to head office and took on the role of Deputy General Manager of the General Affairs Department, responsible for general affairs and public relations.

President Konaga secured support from political, bureaucratic, and business circles and engaged in high-level negotiations with Saudi Arabia and Kuwait to renew Arabian Oil's oil development interests. The negotiations were at an unusually high diplomatic level, with Minister of International Trade and Industry Kozo Watanabe meeting with the oil ministers of both countries, Keidanren Chairman Gaishi Hiraiwa paying a courtesy call on King Fahd, and visits to both countries by the Crown Prince and Princess. As the PR officer, I worked hard to create detailed, supportive articles by attending to the reporters accompanying each delegation. Hoping to foster deeper understanding among both government, I also produced a video showcasing how Japanese and Arabs have collaborated in business development. "Two Wheels Go in Tandem" was produced in both Japanese and Arabic, again serving as a PR tool for both governments.
Furthermore, I compiled a 35-year history, "Overcoming the Gulf War" (in Japanese and Arabic), emphasizing to both governments how Japanese people defended the Khafji site to the very end, even as the threat of war loomed.
The book was ghostwritten by professional writer Hiroshi Omori. A former deputy chief of the Sankei Shimbun's political department, he was well-versed in the history of Arabian Oil since its establishment.

In order to unearth firsthand accounts of the Gulf War, I guided writer Omori around to interview key people who risked their lives to complete their missions.
The on-site interviewing took 10 days, visiting Jeddah, Riyadh, Kuwait, and Khafji. Omori, a sensitive writer, was in tears while interviewing on the experience of Representative Takanashi and his family being taken hostage by Iraqi forces in Kuwait.

Now, let's talk about the main person we interviewed. Mr. Khalil retired shortly after the end of the Gulf War and returned to his hometown of Jeddah to enjoy a carefree life.
He welcomed us, prepared party with his family composed all of elites of Saudi

society.
He emphasized “Saudi and Japan must cooperate even more various field”
Among welcomed family, Abdul Aziz, my former judo student and now university professor attended. We are able to renew our friendship.
It had been a long time since my last kharouf (roast lamb) party, and as this was my first visit to Jeddah, I rolled up my sleeves and began to eat with my bare hands. I noticed that all the
relatives were looking at me strangely. Looking around, they were all serving the meat and fried rice on their plates and eating with forks.
"Mr. Okamoto, have you been stationed in Saudi Arabia for a long time? No one in Jeddah eats like that," he said. Everyone burst out laughing.
Apparently, eating with bare hands is a custom exclusive to inland areas and the Arabian Gulf. In Jeddah, which has developed as an international port on the Red Sea coast, dining etiquette is apparently more refined.

Now, Mr. Khalil. Why did a miracle occur in front of me, as a desperate situation on the eve of the Gulf War? This was the question I wanted to ask most.
"Ah, that time," Mr.Khalil answered with a kind smile.
"It's the same as Mr. Okamoto. If the Iraqi army were to attack, they would naturally cross the border. I was just curious about what the border was like at the time."
(I wonder if that's really true?)

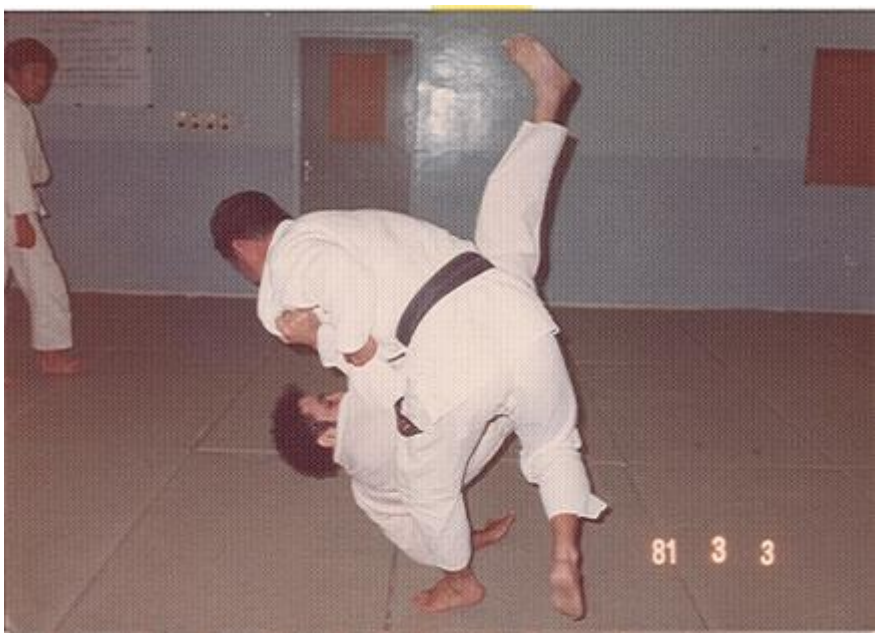
There was a convenient telephone directory published by the field office. Naturally, it listed the phone numbers of all the departments that make up the office, but it also listed the local government and other major organizations in Khafji, making it a useful reference for me in understanding the region and the organizations that govern it. One of these organizations was something called "Civil Defense," and even my subordinates couldn't quite figure out what it was. When I asked if it was a department of the government, they said it wasn't, but it could be considered that way. Then I asked if it was a private organization, and they said it was, but it also has close ties to the government.
In the end, as I understand it, it's probably a "vigilante group." It's not like some friendly group that goes around spreading "fire prevention" messages at the end of the year in peace-loving Japan. In fact, because they are the nation so crisis-conscious that every citizen is armed with a gun, the Ministry of Interior probably mandates the formation of citizen-led vigilante groups, distinct from the military or police. Of course, this is only speculation, but I suspect that Khalil, the deputy

director for government relations, was the head of the vigilante group or a similarly important position. It's unclear whether the man who pulled me over during a car chase on the eve of the war was a soldier or a police officer, but it's possible that he was a member of some third organization. While hot on his tail, he called out, "Suspicious vehicle spotted! Under chasing now !", so perhaps Mr.Khalil flew in to decide what to do about it?

After releasing me, I would think that Mr.Khalil would return with me to the Field office, but instead he sped off in the direction of the border. War was just a few hours later.

If he were the head of the vigilante group, he would have kept staff stationed at key crisis management locations until the very end, so would he have needed to check that they hadn't given in to fear and abandoned their duties and fled?
Or, being the compassionate man he is, perhaps he went to the staff stationed at the border to tell them that it was too dangerous and that they should leave as well, and release them?
When I asked why he'd appeared at such perfect timing when I was in such dire straits, Mr. Khaleel smiled kindly and replied, "That's not important."

Adult training group members one day.
Next to me is Japanese teacher Motoki-kun, and next to him is Abdul Aziz.



The author training Mr.Khalil's youngest brother, Abdul Aziz.

A welcome party at Mr. Khalil's mansion in Jeddah. Attendees included government officials, Saudi Arabian Airlines executives, and other elite members of the Khalil family. His youngest brother, Abdul Aziz (to the author's right), a former judo student, had been promoted to professor at King Abdulaziz University.
Mr. Khaleel is on the far right in the front row. Writer Hiroshi Omori is on the far left in the front row.

Fumioi OKAMOTO
Born in 1947. Former Arabian Oil, Former Secretary of State for Policy in Japan,
Author of “Gulf War, -The Epic of Oil Men”
Kodokan Judo 5 dan, Kuwait Judo Federation 7 dan

To be continued